

【14】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 123頁 からの引用)

舍利弗 彼仏国土 微風吹動

舍利弗、かの仏国土には、微風吹きて、

諸宝行樹 及宝羅網 出微妙音。

もろもろの宝行樹および宝羅網を動かすに、微妙の音を出

す。譬如百千種樂 同時俱作。

たとへば百千種の樂を同時にともになすがごとし。

聞是音者

この音を聞くもの、

皆自然生 念仏 念法 念僧之心。

みな自然に仏を念じ、法を念じ、僧を念ずるの心を生ず。

舍利弗 其仏国土 成就如是 功德莊嚴。

舍利弗、その仏国土には、かくのごときのごときの功德莊嚴を成就せり。

ことばの説明

行樹(ごうじゆ)

13頁に出てきました。並木のことです。

羅網(らもう)

13頁に出てきました。宝石で飾られた網飾りのことです。

大意

舍利弗よ、極樂には穏やかな風が吹きわたり、樹々や羅網がひと揺れするごとに麗しい音が流れる。

それはまるで百千の音楽を同時に奏でるがごとくである。

この音を聞くものは

皆、仏宝僧の三宝を念ずるのである。

舍利弗よ、極樂はこのように美しい姿が成就されているのである。

内容

ここまでで、お浄土のすがたが様々に説かれてきました。まとめてみますと、

極樂は苦がなく樂のみであるから極樂とお呼びするのである。この世の苦にはいろいろありますが、生まれ変わり死に変わりする輪廻(りんね)的生存が「苦」そのものなのであります。そのことをお釈迦様は「一切皆苦(いっさいかいく)」と表現されました。その苦のもとをたどれば、無明にいきつきます。無明とは煩惱のなかで最も根源的なものであります。闇にたとえられる無明とは真実を知らぬことであります。無明をやぶるのは、阿弥陀様の智慧の光のみであります。樂とは仏法を味わう楽しみであり、それは衆生救済という実践を伴う楽しみであります。

極樂は、四宝でできた欄干や並木や網飾りによって囲まれている。また八功德水の満ちた池があり、底には金砂がしきつめられている。池のまわりには宝でできた階段があり、岸には宝でかざられた楼閣がある。池には車輪のような大きな蓮華が咲き誇っている。

極樂の人々は、朝には諸仏を供養し、食事前には極樂に戻って食事と散策をなされる。

極樂には六種類の美しい鳥々がいて、仏法をときのべている。この鳥々は阿弥陀様が仏法を説き述べるために姿を変えたものである。

極樂にはおだやかな風が吹いて、並木や網飾りがゆれるたびに、妙なる音がひびきわたる。この音を聞いたものは、深く仏法僧の三宝を敬い念ずるのである。

このようなお浄土のすがたの一つ一つは、13頁でもご紹介いたしました。『大無量寿経』の誓願の完成されたすがたであります。たとえば第三十二番目の願を妙香合成（みようこうごうじよう）の願と申しまして、お浄土の様子がちかわれています。

繰り返し申しますが、お浄土の並木・池・鳥などのすがたは、単なる風景ではありません。四十八願が成就したすがたが「南無阿弥陀仏」のお名号でありますから、お浄土もまた「南無阿弥陀仏」のあらわれであります。お浄土のすがた一つ一つに、阿弥陀様のお悟りの全体がみちているのであります。

このようなあり方なので、第十号に出てきましたお浄土の鳥々の啼き声は仏法を説き述べていると説かれるのです。そして今回は、樹木や網飾りのゆれる音までもが仏法を説き述べ、音を聞いたものは仏法僧を深く敬い念ずると説かれるのです。

また20頁で説明いたしました。七祖の一人、曇鸞大師様はその御著書『往生論註』の中で次のように解釈なされました。お浄土のすがたの一つ一つについて「仏事をなす」とあかさされたのです。お浄土のすがたのひとつひとつは、お悟りのあらわれでありますから、仏様のお仕事をなさるといふのであります。つまり衆生救済にあたるというわけです。

以上のことからもお浄土のすがた（莊嚴）が、単なる風景でないことはおわかりいただけたと存じます。お浄土のお莊嚴の一つ一つは阿弥陀様のお悟りのあらわれであり、その一つ一つが衆生救済のはたらきをしているのです。ですから、曇鸞大師様は、お浄土の莊嚴を心に思い浮かべて、素直にお浄土に生まれたいと思ふことで、お浄土のお徳が私どもはたらきかけてくださるとお示しくできました。

ですから阿弥陀様の仰せをそのままお聞きして、浄土に生まれたいと願って、お念仏申すことをすすめられたのです。

【15】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 123と124頁からの引用)

舍利弗 しやりほつ 於汝意云何 おによいいうんが。

舍利弗、なんぢが意においていかん。

彼仏何故 ひぶつがこ 号阿弥陀 ごうあみだ。

かの仏をなんがゆるゑぞ阿弥陀と号する。

舍利弗 しやりほつ 彼仏光明無量 ひぶつこうみょうむりょう

舍利弗、かの仏の光明無量にして、

照十方国 しやうじふうこく 無所障礙 むしよしょうげ。

十方の国を照らすに障礙するところなし。

是故号為阿弥陀 ぜこごういあみだ。

このゆるゑに号して阿弥陀とす。

ことばの説明

於如意云何 (おによいいうんが)

お釈迦様が舍利弗に対して、「あなたは どう思うか」と問いかけておられるのです。お釈迦様のお弟子の中で智慧第一といわれる舍利弗は、この問いに対してただお釈迦様の答えを黙して待つのみであります。舍利弗が何故、問いに答えずして聞法の姿勢に

徹しておられたのでしようか。阿弥陀様のお救いは、私共のはかり知ることのできぬおはたらきであり、ただ素直にお聞きしてお受けするのみなのであります。

光明 (こうみょう)

光明とは阿弥陀様の智慧のお徳をあらわすものであります。

無量 (むりょう)

量ることができないということであります。インドの言葉で無量を「アミタ」といいます。阿弥陀様は無量の光明と無量の寿命の二つのお徳をお持ちです。それぞれインドの言葉で「アミターバ」「アミターユス」といいます。共通の言葉「アミタ」を漢字にあてはめて「阿弥陀」と申されるのであります。

大意

舍利弗よ、

何故かの仏様を阿弥陀様と申すと思うか。

舍利弗よ、阿弥陀様の光明は無量であつて、

十方の国を照らすに何の障りもないからである。

だから阿弥陀と申すのである。

内容と味わい

光明無量とは、これもまた『大無量寿経』の四十八願の成就された姿であります。四十八願の中の第十二番目の願を光明無量の願と申します。お経文を掲げますと、

第十二願（光明無量の願）

お経文

読み方（注釈版聖典 17頁からの引用）

設我得仏、光明有能量、

設ひ我仏を得たらんに、光明よく限量ありて、

下至不照百千億那由他諸仏国者、

下百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、

不取正覚。

正覚を取らじ。

正覚（しようがく）とは阿弥陀様のお悟りのことであります。もし私の光明に限りがあつて、百千億那由他の諸仏の国を照らして尽きるようならば仏とはならぬという意味であります。

『大無量寿経』には阿弥陀様のお徳を十二の光にたとえて表現されています。それは『正信偈』にも普放無量无边光の句から詠われています。そのなかに無碍光仏というたとえが出てまいります。

無碍光仏の名の説明については、親鸞聖人の御書物『弥陀如来名号徳（みだによらいみようこうとく）』に示されてございます。ものにさえぎられないこととともに、私共の悪業煩惱にさえぎられぬから無碍（さわりなき）光と申すのである（注釈版聖典 730頁）といわれるのです。

光が何にもさえぎられず無限にいたり届くことは、物にさえぎられぬということだけではありません。最もおおきな意味は、煩惱にさえぎられないということです。私共が悟りを得るにあつての障害となるのが煩惱であります。そのなかでも最も頑固な障害を無明（むみよう）と申します。真実を知らぬことであります。この無明煩惱のゆえに私は、限りない過去から生死を繰り返してきたのであります。阿弥陀様の光明は私の無明煩惱を突き破って私を救うて下さるのであります。

光明は阿弥陀様の智慧であると申しました。阿弥陀様の智慧は私のすべてを理解してどのように救えばよいかを知り尽くす智慧であります。その光明はわたしの無明煩惱を突き破って、わたしを救うてくださるのです。曇鸞大師様は『往生論註』（注釈版七祖篇 97頁）の中で、このことを千年間の暗闇であつても、一瞬の光で闇は去るのであると表現なされました。この一瞬とは阿弥陀様の仰せをそのままお聞きした瞬間のことです。

【16】の御経文 正宗分

読み方（注釈版聖典 124頁からの引用）

又舍利弗 彼仏寿命 及其人民

また舍利弗、かの仏の寿命およびその人民「の寿命」も

無量無辺 阿僧祇劫。故名阿弥陀。

無量無辺阿僧祇劫なり。ゆゑに阿弥陀と名づく。

ことばの説明

寿命（じゅみょう）

阿弥陀様の寿命は、阿弥陀様のお慈悲のお徳をあらわします。

阿僧祇（あそうぎ）

阿僧祇とは、インドの言葉のアサンキヤを漢字にあてたものです。無数という意味です。

劫（こう）

劫とは時間の単位です。諸説ありますが、縦横高さが四十里の城に芥子粒を満たし、百年に一回一粒づつ取り出して、すつかり芥子粒がなくなっても一劫にはおよばないとされます。つまり阿僧祇劫とは無限の時間といってもよいでしょう。

大意

舍利弗よ、阿弥陀仏の寿命も、極楽にいる方々の寿命も無量である。だから阿弥陀と申されるのである。

内容と味わい

寿命が無量であるというのは、『大無量寿経』の第十三番目の願が成就された姿であります。お経文を掲げますと、

第十三願（寿命無量の願）
お経文

読み方（注釈版聖典17頁からの引用）

設我得仏、寿命有能限量、

設ひ我仏を得たらんに、寿命よく限量ありて、

下至百千億那由他劫者、

下百千億那由他劫に至らば、

不取正覚。

正覚を取らじ。

というものであります。

もし寿命に限りがあつて百千億那由他劫で終わるようならば仏とはならぬということであります。

またお浄土の人々の寿命が無量であるというのも第十五番目の願の成就された姿であります。ここでは省略いたしますが、第十五願を眷属長寿（けんぞくちようじゅ）の願（注釈版聖典 17頁）と申します。

さてここで阿弥陀様は光明（智慧）と寿命（慈悲）に限りがないということが説かれました。このことは何を意味するのでしょうか。

まず無量の光明について考えてみます。

前回、光明について説明させていただきましたので、簡単に述べさせていただきます。光明とは阿弥陀様の智慧のお徳であると申しました。あらゆる衆生のもとに至り届き、迷いの原因である無明の闇を照らし破り、すくい取る光明でございます。

あらゆる衆生を救済するには届く距離に限度があつてはなりません。またどんなものにさえぎられてもなりません。なかでも無明煩惱にさえぎられては意味がありません。このようになにもにもさえぎられずに、あらゆる衆生のもとに至り届くのです。何物も障り（邪魔するもの）にならぬということ、無碍光（むげこう）とも讃えられているのです。

次に寿命について考えてみます。

あらゆる衆生を救いとするには時間に限りがあつてはなりません。時間に限定されては、救済されぬものが出てくるのは明らかでしょう。ですから寿命が無量なのです。

また寿命とは阿弥陀様のお慈悲のお徳をあらわすものであります。すべてのいのちあるものを平等に救いとするには慈悲の心が必要であります。智慧だけの冷たい理屈では、苦しみによりそつた平等の救いが出来ないのは明白です。逆に智慧のない慈悲だけでは苦しみの根本原因を解決できないのです。智慧と慈悲があいまつてはじめて完全なる救済が成り立つのであります。慈悲の裏付けのある智慧、智慧の裏付けのある慈悲が必要であります。

もともと阿弥陀様の智慧と慈悲は別々のものではなく一つのものであります。阿弥陀様のお悟りのおはたらきを二つの側面から表現したものであります。一言でいえば「南無阿弥陀仏」のお

名号のはたらきであります。

このように無量の光明（智慧）と無量の寿命（慈悲）によって一切衆生を救われるのが阿弥陀様であります。その阿弥陀様によって建立されたお浄土にうまれるものは、そのとき阿弥陀様と同じお悟りを得させていただくわけであります。ですから、お浄土にうまれた衆生もまた、無量のいのちとなるわけであります。

補足させていただきますと、阿弥陀様の智慧のお徳を象徴するのが勢至菩薩様、慈悲のお徳を象徴するのが観世音菩薩様でございます。

【17】の御経文 正宗分

読み方（注釈版聖典 124頁 からの引用）

舍利弗 しゃりほつ 阿弥陀仏 あみだぶつ 成仏已来 じょうぶついらい 於今十劫 おこんじゅうじゅう

舍利弗、阿弥陀仏は、成仏よりこのかたいまに十劫なり。

ことばの説明

成仏已来（じょうぶついらい）

成仏してからこのかたということす。

十劫（じゅうじゅう）

劫については、前回説明いたしました。無限といつてもよい長

い時間の単位であります。

大意

舍利弗よ、阿弥陀仏は成仏してから十劫の時間が過ぎている。

内容と味わい

法蔵菩薩様が四十八の誓願を成就されて、阿弥陀仏となられてから十劫という年月がたっているということでもあります。ここで一つ疑問が生じると思います。成仏されてから十劫ならば、十劫よりも昔の衆生は救済されないではないか、ということですよ。

この疑問に答えるには、阿弥陀様がどのようにして仏様になられたかを思い起こす必要があります。

14頁で説明させていただきましたが、真実そのものは、色も形もなく思うことも、言葉で表現することもできないのです。私共からつながりを持つことができません。この真実の世界を真如法性（しんによほつしよう）といいます。真如法性から衆生を救わんが為に、法蔵菩薩とあらわれ阿弥陀仏となられたのであります。

法蔵菩薩と名乗っておいでの際に、一切衆生を救うために四十八の願をたてられました。その一つ一つのねがいには、「こうならなかったら私は仏にはならぬ」という誓いが述べられています。そして四十八願がすべて完成されて阿弥陀仏となられたのです。

つまり願を立てられて、そのねがいはたらき通りの仏様になられたのです。もととなる願にむくいて仏となられたということ

です。

この場合、説明するにはどうしても

「願を立てられる↓修行される↓修行が完成し仏とされる」というふうに時間的に順番に説明しなければなりませんから、成仏された時も時間的に表現せねばなりません。成仏してから十劫とはそのような事情の時間的な説明であります。

仏教は今現在の私を問題とするみ教えであります。あらゆる時代の衆生にとって、それぞれの今が問題なのです。阿弥陀様も常に今の私によびかけておられます。ですから、十劫の昔のものにとっても阿弥陀様は十劫の昔に成仏された仏様として呼びかけられました。さらに無限の過去の衆生に対しても、阿弥陀様は十劫の昔に成仏された仏様としてよびかけられました。ですから結局、阿弥陀様は無限の過去にすでに成仏されていたといただくことができます。

しかしそのような詮索は、折角わかりやすく阿弥陀様のおいわれをお説きくださったお釈迦様のみ心にそむくことでもあります。私共は、素直に十劫の昔に阿弥陀様が建立なされた西方浄土におもいを馳せ、お念仏させていただくのみであります。それがそのまま阿弥陀様の仰せにしたがうことでもあります。

【18】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 124頁 からの引用)

又舍利弗 彼仏有 無量無辺 声聞弟子

また舍利弗、かの仏に無量無辺の声聞の弟子あり、

皆阿羅漢。非是算数之所能知。

みな阿羅漢なり。これ算数のよく知るところにあらず。

諸菩薩衆 亦復如是。

もろもろの菩薩衆、またまたかくのごとし。

舍利弗 彼仏国土 成就如是 功德莊嚴。

舍利弗、かの仏国土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

ことばの説明

声聞 (しようもん)

お釈迦様の説法を聞いて悟りを開かれる方々のことです。これに対して、一人で修行して悟りを得る方々を独覚(どっかく)または縁覚(えんがく)といいます。

阿羅漢 (あらかん)

修行段階の名称であります。

大意

また舍利弗よ、極楽には無量の声聞がおり、みな阿羅漢である。その数は数えることができない。また数えきれぬほどの菩薩がいる。

舍利弗よ、極楽はこのような麗しい姿が成就されているのである。

内容

お浄土の声聞方が無数におられるのも、『大無量寿経』の第十四番目の願が成就されたすがたであります。第十四願を声聞無量(しようもんむりょう)の願(注釈版聖典 17頁)と申します。

浄土真宗の御法義は、お浄土参りと成仏が同時であるのに、なぜお浄土に声聞方が無数におられるのだろうかと疑問をお持ちかもしれません。このことにつきましては、次回にご説明いたします。

【19】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 124頁 からの引用)

又舍利弗 極楽国土

また舍利弗、極楽国土には、

衆生生者 皆是阿鞞跋致。

衆生生ずるものはみなこれ阿鞞跋致なり。

其中多有 一生補処 其数甚多。

そのなかに多く「一生補処」の菩薩あり。その数はなはだ多し。

非是算数 所能知之。

これ算数のよくこれを知るところにあらず。

但可以 無量無辺 阿僧祇劫説。

ただ無量無辺阿僧祇劫をもつて説くべし。

ことばの説明

阿鞞跋致（あびばち）

インドの言葉を漢字をあてた言葉です。漢字自体に意味はありません。悟りを開くためには修行によって数多くの段階を踏まねばなりません。少しでも気を許すと修行の段階が逆もどりしてしまうのですが、ある段階に達するともう逆もどりしなくなります。将来、悟りを開くことが決定するわけです。その段階を阿鞞跋致と申します。退くことがないので不退ともいいます。

浄土真宗で「不退の位を得る」とは、ご信心をいただいたその時に往生成仏が決まることをいいます。ではなぜお浄土に不退の人がいるのが疑問ですが、それは後で説明いたします。

一生補処（いつしやうふしよ）

いまの一生が終わって、次の生では仏となる修行の段階のこと

です。補処とは仏様のおられる処を補うという意味です。代表的なお方に弥勒菩薩様がおられます。弥勒菩薩様は今の生をおえた次の生には、この娑婆世界にお生まれになって、お釈迦様にかわってこの娑婆世界の仏様とされるのです。

今の生を終えた次の生では仏となるという点において、他力念仏の人と弥勒菩薩様はおなじ身の上であります。このことを親鸞聖人は大変ありがたくいただいておられます。

大意

舍利弗よ、浄土の衆生はみな阿鞞跋致の位である。

そのなかに多くは多くの一生補処の菩薩がおられて、その数は数えることができない。

そのことを説くには無限の時を必要とするであろう。

内容と味わい

第十五号の説明では、極楽には多くの声聞や菩薩がおられるとありました。今回では浄土に往生したものは皆、阿鞞跋致（あびばち）の位になり、多くは一生補処の菩薩であると説かれてあります。この一節の理解には注意が必要です。親鸞聖人のお示しにしたがわねばなりません。

この一節に関して一つの疑問が生じます。浄土真宗は往生即成仏の御法義ですから、お浄土では皆、仏様なのではなからうか。なぜ仏様になる前の声聞や菩薩、あるいは阿鞞跋致の方々がおられるのであろうか。それはこのような理由からであります。

声聞がお浄土におられるのは『大無量寿経』にその理由が説かれてあります。『大無量寿経』（注釈版聖典 37頁）には、お浄土の声聞・菩薩・天人について次のようなお言葉がございます。「ただ余方に因順するがゆゑに、天人の名あり」

余方（よほう）というのは、お浄土に生まれる前の世界のことです。お浄土に生まれる前の世界での呼び名であります。

どの仏国土にもそこに折られる仏様はおひとりであります。これは修行の末に仏国土を建立された仏様に対する敬いであり、仏様に対する礼というものであります。そこで極楽浄土の場合、『大無量寿経』にあるように、浄土に往生した衆生は、往生する前の名前で呼ばれているのであります。ですから、浄土に往生した衆生は、悟りは阿弥陀様と同じ悟り開かせて頂くのですが、その呼び名は昔の名前であります。そのことを余方に因順すると申されるのです。

これより以降は読み飛ばしていただいてもかまいません。

お浄土に生まれたものは阿鞞跋致の位になるとはどういうことでしょうか。

浄土真宗では浄土へ往生するすがたを往相（おうそう）、お浄土で仏と」なった後、娑婆へ還つて衆生救済するすがたを還相（げんそう）と申します。そしてこの両方ともに阿弥陀様の本願力のはたらきによるものであつて、阿弥陀様から私共に回向されたおはたらきであることから、往相回向（おうそうえこう）・還相回向（げんそうえこう）といひます。浄土往生もその後の衆生救済もすべてお念仏のひとりばたらきであります。

このことに関しましては、親鸞聖人のご著作『教行信証』の「教文類（きょうもんるい）」に

「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。」（注釈版聖典 135頁）とお示しくださつてあります。

つまりお浄土の阿鞞跋致や菩薩方は、衆生救済に向かうために菩薩の姿へとなられた還相回向の姿であると味わうこともできるのであります。補足しておきますと、還相回向は『大無量寿経』の第二十二願（還相回向の願）が成就されたすがたでございます。

【20】の御経文 正宗分

読み方（注釈版聖典 124頁 からの引用）

舍利弗 衆生聞者

舍利弗、衆生聞かんもの、

应当発願 願生彼国。

まさに発願してかの国に生ぜん願ふべし。

所以者何

ゆゑはいかん。

得与如是 諸上善人 俱会一处。

かくのごときの諸上善人とともに一処に会することを得ればなり。

舍利弗しゃりほつ

舍利弗、

不可以ふか 少善根福德因縁しょうぜんこんぐどくいんねん 得生彼国とくしょうひこく。

少善根福德の因縁を以てかの国に生ずることを得べからず。

ことばの説明

上善人(じょうぜんにん)

浄土においでの方々の阿鞞跋致や菩薩などの方々。

一処(いつしよ)

お浄土のこと。

少善根福德(しょうぜんこん)

お浄土へ往生するために自力でおこなう全ての行為を指します。一言でいえば、他力念仏以外のすべての行為を指します。これに対して他力念仏は多善根(たぜんこん)と申します。

大意

舍利弗よ、このような極樂のありさまを聞いたものは、極樂に往生しようと願うべきである。

なぜならば、かの菩薩方とともにお浄土でお会いできるからである。舍利弗よ、

お浄土へは少善根では往生することは出来ない。

内容

他力念仏を多善根といい、自力行を少善根ということについて注意すべき点がございませう。善根の多い少ないという量の違いではないのです。ことばの上では対比するため「多」「少」の文字がつかわれておりますが量の問題ではありません。

浄土往生のために行う自力の行にはいろいろあります。その内容は『観無量寿経』に詳しく説かれてあります。それには大きく二つに分類されます。

一つには雑念をとりはらい、お浄土や仏様などのすがたを心のなかに描き出すこととあります。仏様が説かれるお浄土や仏様の姿がそのまま見えるものは、すでに仏様と同じ境地に立っているといえるでしょう。これは考えただけでも私共には不可能なことです。

もう一つは世間的な善を積み、悪を遠ざけることとあります。22頁で説明いたしました、仏教では今の一瞬のわたしのありかたが、次の一瞬のわたしのありかたを決定すると説かれます。ですから善を積むことで次第に仏への階段を上っていくのであります。

ところが、私たちの心のなかには、無明煩惱があります。たとえどのような善行であろうとも、それは無明煩惱の汚れがともなっております。これでは悟りへの階段を上るのは無理なのです。

これらのおこないを自力の行と申します。どちらの修行も自分

の力をたよって悟りへと向かうのです。これらの行為がすべて少善根と説かれるわけでありませぬ。

しかし、自力であつても無限ともいえる時間をかければ悟りに至るはずだとお考えかもしれませんが。たしかに理屈のうえでは可能でしょう。ですが、このような見方は仏道修行を他人事としてみているのであります。仏教というのは仏様と個人の対話であります。私はどうなのかということが、仏様に問われているのであります。私は阿弥陀様のお導きによって他力念仏の御教えに出会いました。これは誠に不思議なことでありませぬ。そして私とはどのような方をしているのかということを知られました。阿弥陀様はそんな私を見極められて、「おまえは自力でお浄土に往生するのは不可能である。だからおまえのために念仏をこしらえたから、お念仏申してお浄土へ参つておくれ」と申されるのであります。

法蔵菩薩様は自力修行できぬ私に代わって、御修行あそばされて阿弥陀仏となられました。なその功德のすべてを「南無阿弥陀仏」として私に届けてくださったものが他力のお念仏であります。

ここまでみてきておわかりだろうと存じます。自力の行いはどこまでいっても私の無明煩惱によって汚れた行為であります。それに引き替え他力念仏は、阿弥陀様のお徳の全体であります。ですから自力の行為と他力念仏の違いは、善の量の違いではないのです。

私の行為と阿弥陀様のお徳では、その質が全く異なるのです。

お浄土は完全なる悟りの世界であります。そのような清浄な悟りの世界へは煩惱の手垢のついた行為で往生できないのは当然であります。往生するには阿弥陀様のお力によらねばなりません。

また次のようにも言えます。お浄土は『大無量寿経』の四十八願が成就されたものです。その中で、お念仏申させて浄土に生まれさせようと誓われておられるのですから、お念仏でなければ往生できないのは明白であります。

【21】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 124、125頁 からの引用)

舍利弗 若有善男子 善女人

舍利弗、もし善男子・善女人ありて、

聞説阿弥陀仏執持名号

阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、

若一日 若二日 若三日 若四日

もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、

若五日 若六日 若七日

もしは五日、もしは六日、もしは七日、

一心不乱

一心にして乱れざれば、

ことばの説明

善男子善女人（ぜんなんしぜんによにん）

念仏の行者であります。

聞説阿弥陀仏（もんせつあみだぶつ）

名号のおいわれを聞くことでもあります。

執持名号（しゅうじみょうごう）

名号とはお念仏のことですから、お念仏を忘れずに保つことであり、称えることでもあります。この言葉の理解には注意を要します。後で説明いたします。

若一日（にやくいちにち）

一日に限らぬということです。ほかの日数についても同じです。つまりお念仏を称える期間を限らぬということでもあります。ということは、一声から一生継続ける念仏までを含みます。

一心不乱（いつしんふらん）

心を乱さずに、ここからお念仏すること。この言葉の理解には注意を要するのであります。のちに説明いたします。

大意

もし善男子、善女人が

阿弥陀仏のお名号のおいわれを聞いて、

名号を一日、二日、三日、四日、

五日、六日、七日とかぎらず、

一心に称えれば、

内容と味わい

今回の第十八号と次回の第十九号の一節は親鸞聖人のお示しにしたがいながら、注意深く理解せねばなりません。それは、隠頭（おんけん）というものです。

浄土三部経には隠の義と頭の義があるというのが親鸞聖人の明らかにしてくださったことでもあります。

頭（けん）とは、表にあらわれた意味です。お経をふつうに拝読したときに受け取れる内容であります。

隠（おん）とは、お経をよくよく拝読すると、言葉の端々にあらわている仏様のご本意のことでもあります。

具体的に見てみますと、

『大無量寿経』はすべて仏様のご本意が説き述べられており、頭も隠もありません。

『観無量寿経』はお経全体にわたって頭（けん）の義と隠（おん）の義が重なっております。

表の意味（頭の義）では、浄土往生の方法として、自力の行が説かれてあります。

仏様のご本意（隠の義）では、浄土往生の方法として、他力念仏が説かれてあります。

『阿弥陀経』にも頭の義と隠の義があります。

表の意味（頭の義）では自力念仏の往生が説かれてあります。

仏様のご本意（隠の義）では他力念仏の往生が説かれてあります。

誤解のないように申し添えておきますが、頭の義も隠の義も本當のことであります。自力諸行も他力念仏も浄土往生の方法として本當のことであります。しかし一切衆生をもれなく救うという阿弥陀様の御本意は他力念仏にあります。ですから、自力諸行は他力念仏へと人々を導くための仏様の巧みな手立てであります。

ここの一節は、普通に拝読すれば「お名号のおいわれを聞いて、お念仏を心にとどめて、一日でも七日でもわき目もふらず一心に念仏を称え続けられ」と読めます。つまり表の意味（頭の義）では自力の念仏のことになります。

では隠の義で拝読します。他力のご信心は、阿弥陀様から賜ったものですから、お浄土参りするまで不変であります。お名号のおいわれをそのまま聞きうけていることが、浄土真宗のご信心であります。お名号が私のうえではたらいてくださっているおすがたをご信心と申すのです。その不変のご信心のすがたを執持名号といただくのであります。「一心」もまた、他力の御信心のこと

であります。このことは親鸞聖人の御著作『浄土文類聚鈔』（注釈版聖典 495頁）にお示しくださっております。したがってこの一節は、他力のご信心を頂いたもののすがたを説いております。

【22】の御経文 正宗分

読み方 （注釈版聖典 124〜125頁 からの引用）

其人臨命終時 阿弥陀仏

その人、命終の時に臨みて、阿弥陀仏、

与諸聖衆 現在其前。

もろもろの聖衆と現じてその前にまします。

是人終時 心不顛倒

この人終らん時、心顛倒せずして、

即得往生 阿弥陀仏 極楽国土。

すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得。

ことばの説明

前回は説明いたしました。『阿弥陀経』のこの一節には、表の意味（頭の義）と仏様のご本意（隠の義）があります。

善男子善女人（ぜんなんしぜんによにん）

念仏の行者であります。

聞説阿弥陀仏（もんせつあみだぶつ）

お名号のおいわれを聞くことであります。

執持名号（しゅうじみようごう）

表の意味（顕の義）は、名号を自力でしっかり念ずることです。

仏様のご本意（隠の義）では、他力のご信心です。なぜなら、他力のご信心は私のものではありません。他力のご信心は阿弥陀様がそのご信心を保ってくださいさるのですから、執持するのは私の役目ではありません。詳しくは第十八号で説明いたしました。

若一日（にやくいちにち）

一日に限らぬということです。つまりお念仏を称える期間を限らぬということでもあります。ということは、一声から生涯続ける念仏までを含みます。

一心不乱（いっしんふらん）

表の意味（顕の義）では一生懸命に念仏をすることになります。仏様の本意（隠の義）では、一心とは他力のご信心のことです。

「臨命終時」

表の意味（顕の義）では正しく「臨終の時」です。

仏様のご本意（隠の義）では、「臨終の時まで」といただきます。

「ご信心を頂いた時から臨終の時まで」ということです。

「阿弥陀仏 与諸聖聚 現在其前」

表の意味（顕の義）では阿弥陀様が数々の聖聚方と共に来迎されることです。

仏様のご本意（隠の義）では、ご信心を頂いた瞬間から、臨終の時まで私をおさめとつてすてぬことであります。このことを撰取不捨（せつしゆふしや）と申します。

「即得往生」

表の意味（顕の義）では、臨終の時に来迎された仏様と共に、お浄土に往生することです。

仏様のご本意（隠の義）では、信を頂いたその場で直ちに浄土往生定まる身となることでもあります。このことを現生正定聚（げんしょうしようじょうじゆ）といいます。

内容と味わい

第十九回の一節とあわせてみてみます。

表の意味（顕の義）で拝読いたします。

自力念仏の人は、お名号のおいわれを聞いて、念仏を心にしつかりとどめ、心を乱さずにお念仏をとなえつづけければ、臨終のときは阿弥陀様が聖聚と共に来迎されて、まようことなく極楽へ往生できるのである。（自力の人は方便化土に往生します）

仏様のご本意（隠の義）で拝読いたします。

他力念仏の人は、ご信心をいただいたその時に、阿弥陀様に撰

取不捨されるのである。そしてその時、往生成仏定まる身とならせていただくのである。(他力念仏の人は真実報土に往生します)

【23】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 125頁 からの引用)

舍利弗 我見是利 故説此言。

舍利弗、われこの利を見るがゆゑに、この言を説く。

若有衆生 聞是説者

もし衆生ありて、この説を聞かんものは、

应当發願 生彼国土。

まさに發願してかの国土に生るべし。

ことばの説明

是利 (ぜり)

お念仏のすぐれたはたらきによつて、往生成仏定まる身となつて、浄土ではおおくの聖聚方とあいまみえること。

大意

舍利弗よ、私は他力念仏のこのような優れたことを知っているから、このように説くのである。この説法を聞いた人は、

お浄土に往生しようと願い、浄土往生するべきである。

【24】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 125頁 からの引用)

舍利弗 如我今者

舍利弗、われいま

讚歎阿弥陀仏 不可思議功德

阿弥陀仏の不可思議の功德を讚歎するがごとく、

東方亦有 阿閼鞞仏 須弥相仏 大須弥仏

東方にまた、阿閼・仏・須弥相仏・大須弥仏・

須弥光仏 妙音仏 如是等 恒河沙数諸仏

須弥光仏・妙音仏、かくの如きらの恒河沙数の諸仏しまして、

各於其国 出広長舌相

おのおのその国において、広長の舌相を出し、

徧覆三千大千世界 説誠実言。

あまねく三千大千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまはく、

汝等衆生 当信是称讚 不可思議功德

へ汝ら衆生、まさにこの不可思議の功徳を称讚したまふ

一切諸仏いっさいしよぶつ 所護念經しよごねんぎよう

一切諸仏に護念せらるる經を信ずべし」と。

ことばの説明

不可思議功徳（ふかしぎくどく）

お念仏によって一切の衆生を救いとるといふ、私共ではおもいはかることのできない阿弥陀様のはたらきのこと。

東方（とうほう）

文字通り方角の東です。ここのは東・南・西・北・上・下と六つの方角が出てきますが、これで仏教という宇宙全体を指します。

出広長舌相（すいこうじょうぜつそう）

長い舌というのは、眞実を述べているということのインド独特の表現です。

三千大千世界（さんぜんだいせんせかい）

ここである世界とは仏教で説かれる世界であり、現在の地球上の世界ではありません。一つの世界が千個集まって小千世界、小千世界が千個あつまって中千世界、中千世界が千個あつまって大千世界といひます。この大千世界を三千大千世界ともいひます。

一切諸仏 所護念經（いっさいしよぶつしよごねんぎよう）

東方のガンジス河の砂よりも多い諸仏方が『阿弥陀經』をほめたたえ、すべての衆生が信じるように護り念じておられるのです。

大意

舍利弗よ、わたしがいま

阿弥陀仏の不可思議の功徳を讚歎するのとおなじく

東方にまた、阿閼・仏・須弥相仏・大須弥仏・

須弥光仏・妙音仏、かくの如きらのガンジス河の砂の数ほどの諸仏方がおられて、

おのおのの仏様はその国において、広く長い舌を出し、

三千大千世界を覆ひて、誠実の言葉をもって説かれる。

へ汝ら衆生、まさにこの阿弥陀仏の不可思議の功徳を称讚される一切の諸仏方が護り念ぜられているお経を信じなさい」と。

内容とあじわい

東方の三千大千世界の諸仏方が、ほめたたえる阿弥陀様の不可思議な功徳とは、お名号のはたらきであります。お釈迦様が阿弥陀様のお徳を賞讚されるだけでは、疑い深い私共は信じる事が出来ぬと心配されて、諸仏方も讚えられていると説かれるのであります。

【25】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 125頁 からの引用)

舍利弗 南方世界 有日月灯仏 名閻光仏

舍利弗、南方の世界に、日月灯仏・名閻光仏・

大焰肩仏 須弥灯仏 無量精進仏

大焰肩仏・須弥灯仏・無量精進仏、

如是等 恒河沙数諸仏

かくの如きらの恒河沙数の諸仏ましまして、

各於其国 出広長舌相

おのおのその国において、広長の舌相を出し、

徧覆三千大千世界 説誠実言。

あまねく三千大千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまはく、

汝等衆生 当信是称讚 不可思議功德

へ汝ら衆生、まさにこの不可思議の功德を称讚したまふ

一切諸仏 所護念経。

一切諸仏に護念せらるる経を信ずべしと。

内容

意味合いは東方の場合と同じであります。

【26】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 126頁 からの引用)

舍利弗 西方世界 有無量寿仏 無量相仏

舍利弗、西方の世界に、無量寿仏・無量相仏・

無量幢仏 大光仏 大明仏 宝相仏 浄光仏

無量幢仏・大光仏・大明仏・宝相仏・浄光仏、

如是等 恒河沙数諸仏

かくの如きらの恒河沙数の諸仏ましまして、

各於其国 出広長舌相

おのおのその国において、広長の舌相を出し、

徧覆三千大千世界 説誠実言。

あまねく三千大千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまはく、

汝等衆生 当信是称讚 不可思議功德

へ汝ら衆生、まさにこの不可思議の功德を称讚したまふ

一切諸仏 所護念經。

一切諸仏に護念せらるる經を信ずべしと。

【27】の御經文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 126頁 からの引用)

舍利弗 北方世界 有焰肩仏 最勝音仏 難沮仏

舍利弗、北方の世界に、焰肩仏・最勝音仏・難沮仏・

日生仏 網明仏

日生仏・網明仏、

如是等 恒河沙数諸仏

かくの如きらの恒河沙数の諸仏ましまして、

各於其国 出広長舌相

おのおのその国において、広長の舌相を出し、

徧覆三千大千世界 説誠実言。

あまねく三千大千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまはく、

汝等衆生 当信是称讚 不可思議功德

へ汝ら衆生、まさにこの不可思議の功德を称讚したまふ

一切諸仏 所護念經。

一切諸仏に護念せらるる經を信ずべしと。

【28】の御經文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 126頁 からの引用)

舍利弗 下方世界 有師子仏 名聞仏 名光仏

舍利弗、下方の世界に、師子仏・名聞仏・名光仏・

達摩仏 法幢仏 持法仏

達摩仏・法幢仏・持法仏、

如是等 恒河沙数諸仏

かくの如きらの恒河沙数の諸仏ましまして、

各於其国 出広長舌相

おのおのその国において、広長の舌相を出し、

徧覆三千大千世界 説誠実言。

徧く三千大千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまはく、

汝等衆生 当信是称讚 不可思議功德

へ汝ら衆生、まさにこの不可思議の功德を称讚したまふ

一切諸仏 所護念經。

一切諸仏に護念せらるる經を信ずべし」と。

【29】の御經文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 127頁 からの引用)

舍利弗 上方世界 有梵音仏 宿王仏 香上仏

舍利弗、上方の世界に、梵音仏・宿王仏・香上仏・

香光仏 大焰肩仏 雜色宝華嚴身仏

香光仏・大焰肩仏・雜色宝華嚴身仏・

娑羅樹王仏 宝華徳仏 見一切義仏 如須弥山仏

娑羅樹王仏・宝華徳仏・見一切義仏・如須弥山仏、

如是等 恒河沙数諸仏

かくの如きらの恒河沙数の諸仏ましまして、

各於其国 出広長舌相

おのおのその国において、広長の舌相を出し、

徧覆三千大千世界 説誠実言。

徧く三千大千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまはく、

汝等衆生 当信是称讚 不可思議功德

へ汝ら衆生、まさにこの不可思議の功德を称讚したまふ

一切諸仏 所護念經。

一切諸仏に護念せらるる經を信ずべし」と。

内容

意味合いは最初の東方の諸仏方と同じであります。

【30】の御經文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 127頁 からの引用)

舍利弗 於汝意云何。

舍利弗、汝が意においていかん。

何故名為一切諸仏 所護念經。

なんが故ぞ名づけて一切諸仏に護念せらるる經とするや。

舍利弗 若有善男子 善女人

舍利弗、もし善男子・善女人ありて、

聞是諸仏所説名 及經名者

この諸仏の所説の名および經の名を聞かんもの、

是諸善男子 善女人

この諸の善男子・善女人、

皆為一切諸仏 共所護念

みな一切諸仏の爲にともに護念せられて、

皆得不退転 於阿耨多羅三藐三菩提

みな阿耨多羅三藐三菩提を退転せざることを得ん。

是故舍利弗

この故に舍利弗、

汝等皆當 信受我語 及諸仏所説

汝らみなまさにわが語および諸仏の所説を信受すべし。

大意

舍利弗よ、どう思うか。

この『阿弥陀経』をなぜ諸仏が念じ護る經典と名付けるのだろうか。

舍利弗よ、もし他力念仏の衆生がいて

この諸仏がほめたたえられる名号や経の名を聞いたならば、

この他力念仏の衆生は

みな一切の諸仏に護られて

みな最高の悟りを得ることになる。

ゆえに舍利弗よ
私（お釈迦様）が説き、諸仏方が説かれる『阿弥陀経』を信じなさい。

ことばの説明

於如意云何（おによいうんが）

舍利弗に「あなたはどうかともうか」との問いかけであります。これで二回目です。ここは重要なところであります。

一切諸仏所護念経（いつさいしよぶつしよごねんぎよう）

一切の仏様方が真実のみ教えであると護り念じておられる經典という意味です。これは『阿弥陀経』のことです。

善男子善女人（ぜんなんしぜんによにん）

他力念仏の人です。

聞是諸仏所説名（もんぜしよぶつしよせつ）

及経名者（きようみやうしや）

諸仏が説かれる名とは阿弥陀様のことであり、「南無阿弥陀仏」のお名号のことです。経の名とは『阿弥陀経』のことです。

一切諸仏共所護念（いつさいしよぶつぐしよごねん）

あらゆる仏様方に護り念じられることです。他力念仏の行者を、どうかそのままお浄土参りをしておくれと念じてくださり、護ってくださいるのであります。

不退転（ふたいてん）

不退転の意味については、親鸞聖人のお示しにしたがった理解をせねばなりません。不退転とは修行があともどりせず成仏が定まった身の上です。その段階は浄土真宗では必ず仏様の一つ手前の位であります。しかもご信心を頂いたその時、現生で不退転の位につくのです。浄土真宗ではお浄土に生まれたその時、位がひとつ進んで阿弥陀様と同じお悟りを開かせて頂くことが決まっている身の上ということであり、彌勒菩薩さまは、今の生が終わったならば、次の生では悟りを開かれて仏様となることが決定しています。次の生で仏となり衆生救済にあたるという点では、もったいなくも彌勒菩薩様とおなじ身の上ということになります。

阿耨多羅三藐三菩提（あのおくたらさんみやくさんぼだい）

完全なる最高の悟りを意味するインドの言葉を、漢字にあてた言葉です。漢字自体には意味はありません。阿弥陀様のお悟りであります。

内容と味わい

舍利弗にどう思うかと尋ねる一節であります。つまりここは重要な一節なのです。経の名を聞くことがなぜ重要なのでしょうか。

お経の名とはそのお経の本質をあらわすものです。『阿弥陀経』の本質とは阿弥陀様のお徳であり、いいかえればお名号であります。

親鸞聖人の御著作『一念多念文意』（注釈版聖典 678頁）

に名号と聞くというのとは本願の名号を聞くことであり、聞くというのとは本願を聞いて疑いのないことであり、それを他力のご信心というのであるとのお示しがございます。名号のおいわれを、そのまま疑いなくお聞きしたものは、まさにその時にお浄土で悟りを開くことが決定するのです。このことを、現生正定聚（げんしようしようじようじゆ）といいます。現生とはいまの生のことです。正定聚とは正しく成仏が定まった聚（なかまの意味）ということ

【31】の御経文 正宗分

読み方（注釈版聖典 127頁 からの引用）

舍利弗 若有人

舍利弗、もし人ありて、

已発願 今発願 当発願

すでに発願し、いま発願し、まさに発願して、

欲生阿弥陀仏国者 是諸人等

阿弥陀仏国に生ぜんと欲はんものは、この諸の人等、

皆得不退転 於阿耨多羅三藐三菩提

みな阿耨多羅三藐三菩提を退転せざることを得て、

於彼国土

かの国土において、

若已生 若今生 若当生。

もしはすでに生れ、もしはいま生れ、もしはまさに生れん。

是故舍利弗

このゆゑに舍利弗、

諸善男子 善女人 若有信者

諸の善男子・善女人、もし信あらんものは、

应当発願 生彼国土。

まさに発願してかの国土に生るべし。

ことばの説明

已発願（いほつがん）

すでに発願したものとという意味です。過去においてお浄土に生まれようと願をおこしたもののことです。

今発願（こんぼつがん）

今現在、お浄土に生まれようと願をおこしたものとという意味です。

当発願（とうほつがん）

未来において、お浄土に生まれようと願をおこすものという意味です。

発願（ほつがん）

願をおこすこと。ここではお浄土に生まれようと願うこと。発願についてはあとで説明いたします。

已生（いしやう）

過去に発願したものは、すでにお浄土へうまれているという意味です。

今生（こんじやう）

今、発願したものは、今お浄土にうまれるという意味です。

当生（とうしやう）

未来において発願したものは、未来においてお浄土にうまれるという意味です。

大意

舍利弗よ、

もし念仏の人で、

過去に発願し、今発願し、未来に発願し、

阿弥陀様のお浄土に生まれたいと願うならば、これらの人々は

最高の悟りを得ることが決定した身の上となり、

過去に往生し、今往生し、未来に往生するのである。

だから舍利弗よ、
お浄土にうまれようと願うべきである。

内容

ここでは、過去・現在・未来の他力念仏の行者のすがたが説かれて
います。

阿弥陀様の救いの目当てとなるものは、過去現在未来にわたり、
時間に限定されぬことが説かれています。そしてもうひとつ大切
なことは、今の生がおわつたら、必ず次の生でお浄土でお悟りを
開かせて頂くということです。過去に発願したものが未来に往生
するとは説かれておられません。

発願について（ここは飛ばしていただいてもかまいません）

ここで疑問をもたれた方がおられたかもしれません。

「発願」とはお浄土に生まれたいと願うだけである。お念仏をす
すめられないのはどうしてだろうか。

これはきわめて大切な疑問です。専門的になりますので、結論
だけを述べます。

法蔵菩薩様は、四十八願を発願なされ、ご修行なされて阿弥陀
様とられました。その阿弥陀様のお徳がすべてこめられている
のが「南無阿弥陀仏」のお名号です。ですからお名号には成仏に
必要な願（法蔵菩薩様が私に代わって発願あそばされました）と
行（法蔵菩薩様が私に代わって御修行あそばされました）が備わ
っているのです。そのようなお名号が私に届けられている

のです。それがお名号によるお救いでもあります。

ここでの「発願」とはただお浄土に生まれたいと「願うだけ」
の意味ではありません。阿弥陀様の「念仏申して浄土にうまれて
おくれ」という仰せを疑いなく聞きうけて、お念仏申すことを指
していることがおわかりいただけると存じます。